

情報化時代の Identity

原野利彦

Identity & Information-oriented Society

Toshihiko HARANO

【問題意識】

我々は「情報化」時代の中で、「自己」とは何かという問いに悩まされている。「自己」とは、世界に対して操作主体として振舞っているはずであった。今、この前提が大いに揺らいでいる。このような「個人」を形成する装置である近代教育は、如何なる「自己」概念を持つようとしているのか。

【1】近代的「自己」の「実証性」の崩壊

「近代においては自己」とは世界を分節化していく原点であり、近代教育はこのような「個人」を形成する装置であった。個人の「自覚」は世界精神の「自覚」を模倣するものであり、それゆえに権威を持ち、歴史の進歩の核であり得るものとしてあった。〈神の似姿としての人間〉という信念は依然として保持されていた。

このような個人を原動力にする進歩史観に現実的な力を与えたものは、科学技術の進歩であり、社会的には革命・改革・民主化などの動きであった。そこでは法則性という考えが自然から社会へ拡張され、また社会理解の仕方から自然のそれへと適用された。この法則性を理解せんとする意志において人間は自己を実現するものとされた。個人が世界をつくるということ、神が人間をつくったということの矛盾は、この法則性理解の方向づけにおいて調停され得るものと考えられた。それは「実証的理性」において現実性を帯び、人々に科学的合理主義と「自己」中心の世界の再構成の可能性に確信を与えた。富と人口の増大、新しい都市空間における日常生活の変化、ヨーロッパ文化の普及、普通教育などの民主的な制度の拡充、奴隷制廃止や刑法改正などの人道主義的理想と結合した改革などがそれを「実証」した。このような「合理性」に対して主体たる「自己」は反抗することもあったが、「それは進歩だから仕方がない」という「進歩」の大義名分のもとに必然性への順応を余儀なくされた。

歴史の「進歩」と個人の「成長」や「発達」は何とか両立しながら様々な問題を「解決」してきた。例えば、(1) 進歩の「基準」は何か。それは「幸福の増大」である。しかし何を幸福と見做すか。これは人それぞれに異なり、比較不可能ではないのか。しかしカントは「幸福になるに相応しい自己の実現」という言葉を提示した。(2) 第2の難問である「規則的な、連続的な発展」ということがある。一体どうやって以前より以後が優れていると判断するか? 後退、停滞、逸脱があっても全体として発展とする「基準」は何か、という難問である。これに対しても「成功すれば進歩」ということで折り合いをつけた。

諸条件を生かして、一番うまくいくことが美德となった。「道徳的に望ましいもの」の実践が歴史的、社会的に可能なものの考察にすり替わったのである。進歩は技術の手だてによって可能だという信仰が拡がり、「有効な手だて」という言葉が方向性を探るキーワードとなる。

しかし《進化・分化（分節化）の進展（複雑化）＝進歩》と《或る倫理的秩序の確立としての進歩》とは異なるものである。進歩史観を可能にする前提として「実証的理性」が必要だが、これが極めて疑わしいものとなったのである。

事実、これらは二つの大戦と、その後の紛争、ナチスの経験による「進歩」への楽観主義の頓挫、ソ連の崩壊による革命への幻滅などによって根底から疑われるものとなってしまった。理性優位に対する反省として生じた深層への洞察も、種々のマインドコントロールを可能にし、これがまた疑惑の対象となった。今や、「進歩」、「開発」のキーワードは姿を潜め、保守的姿勢をも越える原始への憧憬の要素も含んだ平和運動、エコロジー、福祉活動が我々の唯一の倫理的欲望を満たすものとしてあるかのようなのである。

「適応」概念においても、かつてはそれは「進歩」への適応の要求であった。しかし、今では、それは進歩への適応の側面は隠され、ただ「変化」する社会への適応、とか「改革」、「生涯学習」としてある。教育活動における「個性」の重視の主張も、子どもの場合、「小さな専門家」（～博士）という分節化を押し進めるものではあるが、それは倫理的秩序の確立としての進歩とは無関係となっている。このように現代に相応しい「自己」というものの定義は混沌としたままである。勿論、我々は自己を実体的なものとして見る近代主義的な感覚には戻れない。

このような状況下では、教育＝方向づけを可能にする時空感覚は失速する。我々はささやかなエピソードを経巡りながら方向づけらしきものを探らざるを得ない。今や「めまい」は日常化している。カントに見る「現実」のアプリオリな時空は消え失せた。距離とは、漢字の語源では鶏のけづめの意であり、「拒」と同じでふせぐ、こばむを意味したという。我々はもはや何ものに対しても距離を取れず、眩暈のただ中にいる。遠景で見るとかクローズアップして見るのか、いずれにしても距離感がはっきりしない。この情報の時代には詩的言語に似たものが力を持つ。キャッチフレーズ＝コピーの氾濫。あたかも預言＝アフォーリズムが勝利しつつあるかのように。絶えざる秩序回復の欲望は批評家を求める欲求の形を取る。他人に「理解」を求め、一時的な気休めを欲しがらる。

事態の推移は肯定的な結果よりも、マイナスの副産物を生じることの方が多くなり、正否の混淆した迷宮のような世界に住まわざるを得なくなる。この中を、その都度、シミュレーションをしながら進んで行く。そこには肯定的言辞の並列だけがある。ブラウン管も新聞紙においても、正否いずれの言辞も同一平面上に並べられ、何ものをも否定されることなく混淆する。偉大な言葉も宣伝広告も模範へと翻訳される（イエス・キリストは偉大な宣伝マンであった）。現代では何を預言しようと正しいことになっている。かつては偉大なものとされたものも含めて、すべてはポケットに入れて持ち歩けるようになった。電子ブックの大百科事典。かつてホイットマンは、自分の詩がポケットに入れて歩けるような本になるのを望んだ。皆が自分を連れて行って来て、野外で自分を読んでもらいたくなるような気持ちになることを願った。この夢は実現しすぎたくらいだ。手の届かぬ暗黒の深さは消し去られてしまう。反省（鏡・メディア）をいつも持ち歩くことができるが、同

時に鏡（反省）のすぐ後ろにいる魔物—混沌に気づくことにもなる。論理，レトリック，理性，併合，美，調和は，すぐに裁判にかけられる。鏡の裏にいる魔物退治のための必死の活動がなされた。それは深層にせまる精神医学や，社会の病気の根元的治療としての革命（マルキシズムなど）であった。鏡の裏は何と抑制された性欲，経済的欲求にすぎなかった。これは「科学」の名において見出された。それは啓蒙を図る科学であったが，暗黒を啓くよりも，暗黒を覆い隠してしまった。たとえば無意識も幼年時代の経験に翻訳されてしまった。

こうして「問題解決」などを方法原理とする近代の「教育＝方向づけ」は「個の確立」「自ら学ぶ」という名目の下にその性格を一変させてしまいつつある。機械的，物理的無名性に替わって，「情報」的無名性へと変化しつつある。個々の子どもの「体験」は近代的な文脈から「情報」的文脈へ推移している。それは同時に，子孫に富を譲渡する可能性を配慮することが当然とされている文脈の中に成立する「有用な個人」から，「生涯」にわたって「情報」を追い求め続ける「情報送受信的個人」という文脈でもある。「生涯学習のための基礎学力」などの教育用語も濫用されている。近代的個人は或る人間の企てが死や病気や事故などによって挫折させられるとしても，他の個人や集団によって引き継がれるであろうし，そのためにある程度の恒久性がある文脈をもつ「所有」が慣習化されている文脈における「有用性」の中での個人であった。その個人の「体験」もこの文脈に包摂されていた。我々は今，この「有用な体験」の文脈を守り抜き継続することによって，「情報」時代における個々人の存在の危うさ（死・挫折・崩壊）に対して必死に抵抗しているのである。

我々は今の体験は他のものを常に指示している，つまり今の体験の内容は，そうでないある他のものを常に指示しているという考えに対して用心深くならなければなるまい。なぜなら，体験をその都度満たしている瞬間瞬間の所与がたえずひっきりなしに，他の所与を指示しているという考えが正しいとすれば，個々人は全くシステムに組み込まれているという文脈に無抵抗になってしまうからである。体験の直接的顕現性と他の体験の可能性を超越性において見るという次元を逃してしまう危険性に曝されているからである。だからルーマンのいうように，今の体験は他のものを常に指示しているのだから，意味とは体験の直接的顕現性と体験の他の可能性の超越性とを統合する体験処理の形式をいう，と一気に言い切ってしまうには体験の詐取を許す余地があるのだ。

「主体」としての「自覚」は状況を対他的に捉えるときのみ成立すると考えれば，その「他者」なるものが欠落している「単独者」の余地が全くない文脈においてのみ反省は成立することになってしまう。「情報」という境位は，〈情報送受信的主体〉などという主体を創り出した。確かにこれは客体化された図式的な論理関係によって必然性が用意されているような世界観は拒否する力を持っているとは言える。だが〈情報送受信的主体〉なるものは両刃の剣であって，均質的なシステムのなかに主体を位置づけ，その中でのみ遠近法を構築するものとしての主体としてのみに「自己」を限定することにもなるのである。

この手続きは次のようなものである。専門家的な目で世界を見る能力 《問題を立てる意欲と能力，他のやり方を提示する能力（代替案・選択肢），直感力》を育てるために，物

語構成力を媒体にして日常の暗黙知を利用して考えさせ、このあとアルゴリズムを教える、というようなものである。

このように「情報社会」に生き残る絶対的な分節化の核としての「個人」は、専門家的な〈情報發送—受信的主体〉として衣更えしている。しかしこのような存在として「自覚＝自己意識」を促された核自体が全く方向性を失った浮遊物であるにもかかわらず、不思議なことに「情報の均質時空間」で浮遊することが前提されているのである。それは民主的問題解決という文脈の中での参加であり、コンセンサスである。それは Simulation 化された民主主義である。主体は技術的問題発見・解決能力へと矮小化される。つまり主体は技術的秩序形成の主体に局限されるのである。電子メディア時代の主体形成は、「情報」を自ら集め、発信する「ボランティア」に、その理想的典型をみることになる。つまり「新しい関係性の開発」という新時代の指導指針に適合する主体が求められているのだ。その時、教師自身の感性の組み替えも要求される。計画の媒体になれない主体は治療され収容される。その時、教師はカウンセラーの役割も期待される。「自覚」は教師サイズに縮減される。

【2】「情報」的眼差しは実存を問う力を持っているか。

しかしこのように「情報」的に組織化された眼差しは、虚空の中で実存の意味を問う力を持っているだろうか。「危機」における「体験」の過酷さに対して、我々の「情報」的「問題解決」能力は太刀打ちできるだろうか？アイスキュロスが運という視点で人間と神とを天秤に掛けたように、運・危機においては問題解決という近代的認識優位の系譜をひく「情報」優位は歯が立たないのではないか。J.Dewey が近代工業をモデルにして継承し、再定義したヘーゲル流の弁証法も単なる悟性的認識から理性へと、そして精神へと形而上的に高まるはずのものであった。だが、この「精神」が、中央集権的官僚の認識能力に具現され、そして崩壊していった。これは「連続性」を核にする以上、どうしても context に還元できない個性という問題には対応できなかった。むしろ先ず客体化し、それからその身になってともに「自覚」の道を歩み、それから官僚的統制のものに回収するものではなかったか。これで「情報」的意味の浮遊は防ぎ得るといえるのか。

自己は問題的＝謎であり、シンボルやメタファーの次元にあるものだろう。これが近代的機械工業に現実的モデルを求めた「連続性」の概念で捉え得るのか。電子メディア時代の主体形成とは、物語構成力を媒体にして日常の暗黙知を利用して考えさせ、このあとアルゴリズムを教える、という専門家への誘導という戦略上の概念になる。こうして人々は専門家的問題意識、意欲、直感力、世界観へと誘導されていく。例えば教育の現場では(イ)体験的活動の重視(ロ)集団宿泊(ハ)奉仕活動などが挙げられる。—これらを一貫するのは「新しい関係性の開発」にある。益々専門化していく眼差しは、生きる人間の眼差しを失う。ビデオカメラのファインダーから世界を覗く専門家はいても、生きた眼差しは失われる。専門的に組織化された眼差しがあるのみだ。これは「情報化」という地平における人々の欲望と感覚の動員と再定義・再編成である。

しかし、人は次のように言うことも出来る。かつて大航海時代以後の数百年間のコレクションのように〈雑然とした多様性〉から18世紀後半の大工業時代の〈秩序づけられた多

様性)へと移行したように、現在の情報化の〈雑然とした多様性〉の時代は終り、やがて何らかの〈秩序づけられた多様性〉が始まるに違いないと。この議論の地平は成立し得るか。これはエントロピー増大という熱力学の第2法則を通俗的に援用して、自己組織論として展開される。

一般に諸々のシステムは、それ自身より大きなシステムに組み入れられている。「個人」というシステムも、例えば学級というシステムに組み込まれている。この学級もかつてのような物理的監視体制（壁に囲まれ、座席に生徒を縛りつけ、他の情報を遮断し、一元的な情報のコピーを強いる）が可能である時代を終わりつつある。だから、これを越えて、一つの（もしくは多数の）「情報」の場へと再定義され、自己組織化されねばならない、と。ここではかつてのような形態での「自己」の匿名性はもはや時代遅れのものとなり、「情報化」時代の匿名性へと移った。

例えば問題設定の場面では、かつてのように一つの問題意識を強制的にコピーすることはもはやなされない。少なくとも個々人の多様な「問題意識」なるものが尊重される。そしてここでも「自己組織化」の過程は進んでいるとされる。たとえ多様な部分が散乱し自己主張したとしても、そこにはおのずから、その時々々のシステム（学級）の状況に相応しくない選択肢と、クローズアップしたい選択肢との仕分けが、「指導」の名においてなされる。たとえ、子どもが自分自身で問題を整理して提起したとしても、その過程での取捨選択がなされている。子どもは自分と異なる高度な複雑性をもつ指導や学級の雰囲気によって、提起以前に、すでに取捨選択を行っているのである。個々の子どもから見ると、指導や学級の雰囲気は偶然性がより少なく、予測可能で安全な構造を成しており、間違いのない道を示しているように見える。このようにして、ピアジェの言う「同化と調節」というより高次のシステム（学級）との交換を個々人が行われる。これが自己を構造化しつつ、外界を作り変えることと説明される。こうして〈情報発送—受信的主体〉が形成される。

この際、正常とされる「境界」を刻々に設けつつ、この「同化と調節」がされるのだが、子どもはこの「境界」を定かに見ることが少ない。これに対して、子どもに代わって、この交換を可能にする「境界」を確定することが教師などの大人の仕事となる。また継続的に「失調」状態にある者を精神障害者と名づけ医者が境界の確定者となる。）

先ず教師や医者が向こうに行って、それからこちらに還ってくる。ここで二つの世界の架橋をする。こうして子どもや患者の自己言及性は専門家経由のものとなり、「自分の主体性を本気に受け取らない」（サルトル）相対化の作用（「反省作用」）となる。ここに教師や医者「指導」・「治療」と個々の子どもや患者自身の反省とが、学問的、客観的という地平で重なり合うことになる。これが現代においては「情報化」とも重なることになる。

だが、この「反省作用」が「激甚な体験」に捉え得るか、つまり突然のカタストロフ＝暴力的とも言える苦難に人々を耐え得るようにできるか。「供犠」を求める我々の暴力性に中村雄二郎のいうような「受苦」という生温い体験で対応可能なのか。西欧近代が普遍性を偏愛し、個々の「固有の場」を無視する傾向にあったことは確かである。しかしこれは悟性的反省を越えて、より高次元の「体験」つまり（高次元の受苦—キリスト）を目指し、それにより個々人の受苦を深い意味で捉えようとする要素をも強く持っていたのである。

【3】「参加」による「活性化」は「苦痛」の伝達を偽装する。

現代において「活性化」というキーワードがあるように、我々にとっては「個人」の問題も徹底して「再生」（新たな力を得ること）の境位の文脈で追及することが大事となっている。生の或る局面を強調（クローズアップ）することによって、（他の点を弱めることによって）、自らの生命力を活性化しようとする。特に「陶醉」が快樂の極点として追及されたりする。それが力が増し充実した感じをもたらす高次のものであるか否かは定かではない。だが自分の世界を貧弱化させることを願っているわけではあるまい。だが反省にせよ、情報化にせよ、それらは我々自身の固有の「体験」を貧相なものにしているのである。

生命力の活性化、再生のために否定作業を続けていく近代の自己というモデルはキリストの苦悩への探求の蓄積の上に形成された。近代的個人は古層の再生儀式に重ねられた。復活を包含したキリストの苦悩が世俗の個人的な苦悩や喜びの探求の蓄積へと連続させられたのである。この再生のイメージは聖務としての儀式から世俗の儀式へと変質し、学校やブラウン管の中で「活性化」の儀式・演技として復活した。そこでは演出効果が重視され個人の苦悩はスペクタクルになった。「苦悩の重み」はテレビ放映されるニュースのネタとなる。

近代的遠近法的によってだけでなく、如何なるコミュニケーションの形態をとろうとも、自分自身の痛みは決して他の「体験」を指示しない。近代的労働のリズムが均質化された物理的時間であり季節や風土に関係がなくなるために「苦痛」が伝達されにくくなるというだけではない。勿論、苦痛は近代の普遍的方法としてのテーブル上での作業を通しての、比較する理性＝認識に従属するものではない。苦痛は文字どおりの「危機」において、人間離れした変身を要求するのであって、安全圏で観察され比較され、その特殊性を強調されるといったような、傍観、静観をこととする個々の「体験」の比較上の特殊性を意味しはしない。要するに、普遍と個との関係で語られるものではない。丁度、ニーチェが「自然と人間」という言葉の「と」を嘲笑ったように。

近代では遠近法は公共性を成立させる媒体と見なされる。人々が一堂に会し互いに視線を交わし合う所に成立する超越的なものが普遍的原理として人々に分与されるという仮構が共有されるわけである。これが〈参加〉である。つまり広場に集う群衆が相互に視線を交わし、そこに或るリズムが集約する時、完全で透明で可視的な時空間が成立するが、これが光の遍在としての理性の働きと同一視される。だから個人は自らを取り巻く環境や状況（自然や社会）に生命を与え、再生させ、若返らせるためには公共の儀式に「参加」し、そこに発生する力を分与されなければならない。そしてその広場の光によって個々人は自らの同一性を絶えず立て直し保持しなければならない。このように参加者の一人一人は理性の方法である遠近法を働かせて自らをその儀式の司祭に昇格させる義務を課せられている。

しかしここにおいて「苦痛」は、生産工場の論理に折り込まれて不可視となる。なぜなら、能率（スピード）効率（コスト）の文脈において「苦痛」は位置づけられ、解釈されるからである。自分の「苦痛」は「参加」を通して自分のもとには還ってこない。

かつては、「真理」に迫るための方法であった「反省作用」は、「参加」・情報という次元では、疎外の極点、つまり自己へ帰還することのない「反省作用」となる。自己言及性はたんなるキッチュとなる。例えば、J.Dewey は反省作用の資源として「好奇心 curiosity」

を挙げている。彼は《好奇心の発達3段階》として、一手当たり次第の行動（探索行動の端緒）、一矢継ぎばやの質問（合理的説明を求めているわけではない）、一質疑行為を或る目的と結合する構えのある好奇心を挙げる。このような好奇心の「発達」段階——つまり、疑問を目的と結合することは自己から益々遠ざかることになる。このような目的的行為が自己を自己から遠ざけるものであることに古来人々は苦しんできた。たとえば因果の網の目から逃れようと苦心惨澹してきた。

J.Dewey は過去の記憶と今の状況を結合できない者を指して、集中力のないもの、好奇心の欠如した者、指導者に負担をかける者と規定している。勿論、J.Dewey は、広がりを持続力のある好奇心を要求することは、システムとの交換関係に閉じ込めることを主張してはいない。諸事象が次々に相互に指し示し合いながら生起する世界を暗示に頼りながら、偶然に我々に対して生起するものに対して何とか操作的であろうとする。それもできるだけ「科学的」に。彼は言う。「私が思考する」というより「思考が思考する」、と……偶然が支配する世界に「私」を挿入・介入させることによって、責任を取るという行為を成立させようとする。この出発点を、質疑行為を或る目的と結合する構えのある好奇心に求めているのである。

偶然に生起するものを「比較」という方法意識によって、出来事の裂け目の深淵を見えなくし、「私」が比較考量するサイズに縮減してしまう。「個人」が責任 responsibility がとれる＝応答する response 次元にまで世界が切り縮められる。これは安全性・保障を求める慣習に適合するものである。この responsibility を全うする体力と知力を維持するために体を鍛え、節制することが「活性化」であり、「若さを維持する秘訣」だとされる。従来の「進歩」という統制概念から、今では「活性化」、健康保持の「情報」集めへと変わっている。

一般に、我々は或る内面化された context に寄りかかることによって安心する。小心翼翼として、逸脱することを極度に怖がる理由もこの context を踏み外すときの居心地の悪さにある。想像力の源である居心地の悪さを忌避するため、情報化時代には、帰還することのない（見せかけの）自己言及性の中で不安で一杯になりつつも、ひたすらな逃亡を図る。自己言及の一貫性、つまり本来の意味での自己言及からの逃亡である。「自己教育」つまり「自覚」の促進が自己欺瞞となる。

確かに「情報化」、**「参加」**の推進は、かつての物理的システムとの「同化と調節」という個の匿名化、大量虐殺への抵抗ではあろう。しかし、「情報化」によって現実／非現実の「境界」を益々不明確にしておくことによって存続し続ける「同化と調節」は何に向っているか分からぬ中での方向づけであり、自己言及性の崩壊による情報発信拠点としての「個人」の崩壊である。我々は情報を受信・発信するために行為する。むしろ刺激を授受するために或る場に居合わせようとする。丁度、テレビの前でくつろぐとき、情報も入手できるというように。

【4】「臨床的知性」

我々は生きていく過程で出会う事物や事象を意味あるものにする make sense ために、自分がくつろげる場に特定のアクセントをつける文脈を慣習的に持っており、それを刻々に探り出しながら生きている。例えば、テレビを前にしての大人との「会話」をする場合、

大人は固定した枠組みを意識的・無意識的に与える。子供はその会話において、それに適合した言語カテゴリーを組み込まなければならない。

その時、子どもは新しい文体つまり新しいリズムを探りつつある。これはちょうど自然科学者が新しい顕微鏡や望遠鏡などを捜しているようなものである。しかし大人達は「会話」に子供たちを引き込む過程で、子どもの求めている自分なりの感性を無頓着に扱いがちである。もしくは学校で、また「家庭学習」において、プログラムや手続きの調整という文脈に子どもを引き入れる。そのような過程では満足させられない子どもの個性は沈黙を強いられる。

だからこそ「会話能力」は「独り言の能力」より発達が遅れるのである。母親が子どもをあやす独特の抑揚と単純な語彙の繰り返しや、教師などとの会話、テレビ独特の語りかけの調子は、発話の構造を組織化していく。子ども自身も一人のとき人形を相手に父母のまねをして何度も言い聞かせてその発話形態を習得していく。我々も冷戦後の現在、新たな発話形態を探っている。

これらの会話などは子どもを絡めとる網の目である。そこでは無意識裡に、すり替え、詐取のレトリックが駆使される。それはカウンセリングという名で呼ばれることもある。「臨床的知性」とはまさにこのことの巧妙化である。子どもはこうして他者を詐取する方法を「作法」として習得していく。子どもは悪意で立ち向かわざるを得なくなる。悪意が美となる。ピカレスク。深層生活は複雑化していき、老成し、カウントダウンの感覚が蔓延する。《猿を聞く人 捨子に秋の風いかに》

「臨床的知性」は常識による人間関係が不可視になった時代に、専門家的「情報」の次元で「現実」を演出するセラピストの論理である。専門知を装う次元が錯綜のした場をつくりだす。いかにも専門知らしく整理された「情報」のみが唯一の生命の刺激となり、情報時空間においてのみ諸問題が解決し得るとする。このように「問題解決」という構えをとること自体が情報時空間に身をおくことになる。それは記号化された次元であり、物質的感性に乏しいものであることは否めない。確かに〈問題—解決〉のゲームの地平は或る活気をもたらすことはある。そしてこの地平に添わない者、つまり問題児を治療の客体とすることもできる。問題解決の地平での敗者の鎮魂の儀式として治療をする。「問題解決」の地平で疲労困憊した者を舞台上に上げ、見物の客体としての生け贄にして社会は沈静化に向う（供犠）。大衆の怯懦、物見高さ、覗きの欲求に迎合する知。

「臨床的知性」は「コスモス」、「演劇知」、「身体性」というキーワードによって、従来の近代的科学的構え＝操作主義を越えるという。人々はお互いに「時空間の狂い」を「臨床的に」ケアし合う。生産主義の時代は「臨床」とは、他者を、まさにベッドに横たわる者として扱うことを原則としていた。他者は客体にならなければならなかった。屍体のように、ベッドに縛りつけられたままの状態を維持できることを自分の義務として心得ている者だけが、被治療者、観察対象になり得た。現代では、「臨床」とは「労働」によって傷ついた者の傍らに臨むということではなくて、生活の至るところを「病床」にすることである。お互いの傷に触れないように、もしくは傷つかないように適当な距離を取ることになっている。つまり「自立した者」であることを求めることを言う。「優しさ」を求め、振り回すが、お互いに深い次元で介入し合うという「傷つく」行為は避け合うことをいう。助けが必要なときも「距離を取る」残酷さを発揮することでもある。相互に無難であるよ

うに調教し合うことを言う。

日常の中で戯れることが出来る距離、機能性を増加させるために耐えることを拒否し、記号的な満足＝象徴的な意味を深めるリズムにのることが重要となる。これは耐えることを是とする立場からは、到底理解できない次元で生きなければならないことを意味する。産業の論理（機能主義＝能率、効率）や消費の論理（アクセスの容易さ、享受、感性）では、生命の根源たるエロティシズムの根底性はすり替えられる。産業社会では健全な家族関係のなかに閉じ込められるエロスであり、消費社会では性的情報を販売するメディアの統制へと問題の地平は移されている。エロティシズムを篡奪され、歪められ、「教育的」に薄められ、消毒されたり、消費対象として肥大化させられた世界を若者達は生きる。「情報化」とはそれを「コミュニケーション」の論理に回収しシステム化することである。「新しい関係性の開発」という回収原理によって、様々な手段が生じる…… Network, ボランティアなど。謎＝シンボルとしての自己は伝達時代の時間感覚を継承しつつ、「情報化」時代にふさわしく変質させられていく。産業主義的な Identity＝一貫性、目的・計画・ねらい、蓄積、変換は、消費社会の中で、あらゆるメタファーを駆使しつつ再定義されていく。産業主義的アルゴリズムに誘導するために、消費主義的な物語構成力を日常の暗黙知を利用して育てようとする。直感力の重視が日常的に叫ばれる。

確かにお互いに傷つき合いながらも助け合うということは産業社会の美德であり、今後は不要なものとなるかもしれない。情報を発信し続ける力を維持できれば、乃至、金銭的情報の操作に長けていれば、我々は必要な助力を入手できる。情報を入手し、発信できる能力を維持するには、日常的にノリにノッていなければならないのだ。

「発達」の概念は後退し、「再生」の概念が浮上する。「発信者」たること、「始める者」であることが重要となる。ことを始めようとする力を刺激する「呪文」（キャッチフレーズ、コピー）を唱え得る能力が求められる。〈生と死〉を賭けたものとしての詩ではなく、喚起力のあるフレーズが、その人の「個性を輝かす」のだ。高齢者は「再生」利用されることを求める嘆願の歌を歌わねばならない。

しかし、この現代の「呪文」による喚起は、それによって、生命力を盛んにするかのように見えて、実は我々の種々の可能性を切り縮めていく。呪文によって喚起されるものは、所詮、システムへの組み込みになるからである。例えば、教師的《システムの思考》である見通し plan-do-see は終りからのカウントダウンとなっている。潜在的可能性は汲み尽くされ、可能性は無限に減少する。我々は潜在的には既に完了した世界に生きている。現実には既に完了したのである。「問題解決」における問題の状況（岐路的状況）とは「選択行動」という電子的メディアを駆使する代替案への勧誘にすぎない。「生と死（再生）」の、問題は「成長」や「活性化」へと矮小化される。存在からの呼びかけは「意味」の追及へと矮小化されている。主体としての個人を原点にし、トートロジカルに一貫性を追及するヴァリエーションとしての「多様な」生き方や、「個性的」な生き方は退屈なもの、もしくは生存を危うくするものとして嘲笑の対象となる。

これは生きるリズムの不在＝死のような Simulacre となった生だけがあるが露となったからである。我々は「歴史の終わり」にたちあっているのではなく、歴史を失ったのだ。残っているのは記号化されたレトロ趣味だけだ。融通無碍の情動的時空間は近代的な歴史と地理を抹消する。我々は情報によって地理的・歴史的距離から逃亡することが出来る。

多様な視点を取る必要はないのだ。一義的な視点などというものが何かさえ分からなくなっているのだから。欲望は即座に叶えられるし、また叶えられねばならない。ウィリアム・ブレイクのように「行われぬ欲望を育てるよりは、揺り籠の中で嬰兒を殺すほうがましだ」ということが万人のものとなる。

しかし他方では、この融通無碍に見える欲望は流通しやすく、制度化されたものの中に囲い込まれる。なぜなら、「問題解決的思考」のみが「現実」性をもち、解決できる問題に還元されない問題は「非現実」とされるからである。「体験」のもつ象徴性はパロディ化された記号へと転落する。あらゆる逸脱は、その過激な毒気を抜かれて「詩的」なものとなり、コピーとして合法化され、流通し、制度化される。若者の過激はキッチュとなる。

これは表面的には我々はいつも危機に備えた知性を要求されているように見えて、実は真の意味での危機に備える知性を剥奪されていることによる。我々は「激変の時代」に生きているのであるから、いつも「時間の裂け目」に立たされているから、「生涯学習」や「危機」管理の知性を自ら育成するように説得され続ける。それは、絶えず「死と再生」の瞬間に生きるように説教され続けているように見えるが、実はそうではない。いつもこの社会的・歴史的な時間の中で自らを幽閉して生きるように強制されているのだ。つまり自らを救うためには「非一時間」を求めねばならないことを禁止されているのだ。

このように代替案への勧誘と電子的メディアを駆使して「選択行動」を可能にしている現代人は、この世界に幽閉感を感じながらも代替案・「選択行動」以外の行為の世界に向う勇氣に欠けざるを得ない。我々は代替案が許容される世界、例えば学校や学校化した社会でのみ生き得る無害な者になる。若者達は紛い物の「反抗」を装いながら、大人の「理解」を求め、一時的な気休めの中を漂う。再度言えば、このようなことは「生と死（再生）」の問題は、「問題解決」の形で取り扱える「成長」や「活性化」へと矮小化され、存在からの呼びかけは「意味」の追及へと小市民化されることに起因する。

「臨床的知性」は迷宮化した世界を「計画」的知性によっては脱出できないことを隠蔽する。「計画」的行為が生み出した迷宮の中を彷徨う者の存在を前提にして、それを治療することを合法化する。そこでの「方向づけ＝教育＝治療」は、「計画」的行為の世界を批判しながらも、「世の中を変えるのは大変だし、それはその専門家に任せて、人々の心が変わることを待つことにして」、とりあえず一時繕っておく作業を続ける。とりあえずパッチを当て続けるパッチワークの生き方の哲学として、自然のリズムに共感し、世界と交感する感性を養うことを勧める健康哲学、健康食品の哲学がある。このような世界のシミュレーションを描き、我々を組み込んでいく。だから、そこには肯定的言辞の並列・混濁だけがあり、何を預言しようと「臨床的知性」は正しいことになっているのである。我々もそれを納得している。我々は「事実」というより「シンボリックな現実」の問題定立しえないことを知っているのだから。こうして詩的カタルシスを求める暗い欲望を逸らすように誘導し、うまく誘導されることを期待する時空間が成立する。コツは時間と空間を区切って安心させおびきよせることである。「お手間は取らせませんから」と言って「アクセス」を容易にし、領域と時間の「切り替えが上手だ」と褒める。ズブの素人でも近づけないとすれば、それは供給側の責任であり、ユーザーからのヒントをうまく生かせない怠惰の証拠だとされる。一度捕獲すれば、呪詞を何回も、じつくりと時間をかけて聞かせ、

催眠状態にし、相手の出方を見ながら、リズムを詐取する。こうして、親や教師に代表される粗雑な隣人愛を説く通俗道徳を批判する振りをし、「己の本能を聞き分ける繊細さ」の困難に立ち向かっていると煽てあげながら、雑多な繋がりを必然性として繋ぎ直すエネルギーを相手から篡奪する。つまり、「臨床的知性」は、「あなただけの人生」という、珍しいもの＝上品＝格別＝お値打ち品の人生を販売することに一役買うのだ。陳腐なことに珍しさを見出し、演出し、最高の、れっきとした、またとないチャンスに恵まれたと思わせる。こうして「臨床的知性」は、相手の人生を個性的だとして保証付きにし、偶然的なものを、そうなる運命だったと信じこませる。

我々は「体験」をすぐに理解したが。つまり因果律の中で、「計画」的思考の文脈で理解したが。我々はこの因果律の「外」に断固として踏みとどまることをしない。消費社会の商品がその必要を除外してしまったのだ。我々は今までの唯一の課題であった現実的なもののために理想的なものを断念する必要がなくなったことに気づいた。すべては商品として手の届く範囲にあるのだ。クレジットでの支払い、益々欲しい物との距離を縮めた。こうして我々は倦怠のただ中にも気づく。仕方なく、我々は倦怠を認め、物質と自我の象徴的集合体を放棄する。これを「臨床的知性」は肯定する。いわく、これは捕えられたエネルギーの流れの具体的なイメージを宇宙に戻すことである、と。しかもこれは道徳的である。なぜなら大自然は我々の生死など無視して運行するのだから、その自然の前に我々は無であることを知り、拝跪する謙虚さを実践するのだから、と。我々はすべて無になる。無になってファインダーを覗く専門になる。Virtual Reality を紡ぎ出す専門家、つまり覗くべき対象＝生け贄を捜し出し、血祭りにあげる儀式＝「供儀」は「臨床的知性」によって権威づけられ、厳かに執り行われる。

【5】「情報的知性」

脱構築・プリコラージュ・異化は、我々の「体験」を呑み込むブラックホールと化した。あらゆるモデリングは、しかるべきアウトプットを可能にするために必要なインプットを探すためのブラックボックス（文字どおりの暗箱）である。すべては情報の管理と運営に関する理論とシステムのもとにおかれた。独自性は区別の目印としての ID となり、アクセスや管理がし易い対象となる。「個人」の独自性は、システムが自分にも解放されているか否か（資格の有無）に矮小化される。事実、対価とその支払い方法を考慮するシステムにまで「個人」は縮減されているのである。

今日では個人はプログラムとデータを変えるだけで、標準的なものがいつでも時空間的に特殊なものに変えられる自立性を持つようなものとして形成される。社会変化や時間帯・地域性などの変化に応じていつでも変化し得る主体となることが期待される。

それは対話の必要を強調することに象徴化される。それは対話を通じて次のものが入手出来るからである。対話はメニュー選択の反復による情報への到達を可能にする。メニューの提示——選択——更に詳しいメニュー——この繰返しによって必要な情報に達することが出来る。子どもは繰り返しメニュー番号の選択を訓練される。メニューには番号がついているのが当たり前であって、或る番号のものは他の番号のものとは異なると判断するように教育される。そしてそれによって相手に何をして欲しいか伝えることが出来るようになると教え込まれる。自動販売機のような「伝達」観が育つ。

情動的個人とは、アクセスする他者にとって適切な人間でなければ価値がない。適切な人間とは新しくないと価値がないし、変化をもたらさないと価値がないような人間である。そして交換可能であるためには、絶えず発信しておかねばならない。たとえ目的の相手が出なくても発信し続けねばならない。絶えず発信し続ける人間—これが我々のモデルである。

自分の頭脳をハードウェアに見立て、その働きをソフトウェアに見立てる。そしてその担い手である個人をオペレーターと見做す。このような考えで個人は自分のハードウェアの性能を熟知し、それに即したソフトウェアを蓄積し、自分の性格を知ることが求められる。これこそ「情報社会」の「自覚」である。

さらに、情報媒体としての個人は人間の情報媒体、つまり視覚・聴覚・触覚などを鋭敏にしなければならない。たとえばリモート・センシングというように距離を前提にする視覚や聴覚をどのように使うか。相手をみながら交換し合う必要があるなら視覚を使い、相手を注視する必要がないならば聴覚を使うというように。なぜなら視覚はそちらを向くなどのように方向を限定するが、聴覚ならばどの方向でもよいからである。また直接対面しなければならないときには触覚をも動員する能力をもたねばならない。媒体としての慣習、伝統、歴史、文化という教育内容を改変しつつ「自己」を形成しなければならないという難問に直面している。

我々は今、神と呼ばれたり、社会や歴史と呼ばれたり、伝統や文化と呼ばれたりしてきたものを、「情報社会」に合うように再定義している真っ最中なのだ。この中で我々は「自己」を設計しようとして重荷を背負う。かつては神、歴史、伝統、文化は個人にとっては「超越」的なものであって、自分が生きる根拠であった。近代では、この「自己」と「超越」は対立関係にある傾向があった。対権力、対国家、対社会、対歴史というように。近代人は近代人なりに「超越」と「自己」との連続性と断絶のあり方を巡って苦しんできた。融和を目指すとしても、「国家」や「階級」というような抽象的な「超越」に融和して「自己」を抽象化するか（ヘーゲル、マルクスなど）、具体的な「自己」に「超越」を融和させて、「超越」を無に帰さしめるか（実存主義など）、という難問は革命、改革などの社会的実践を伴って現実的の重みを持っていた。

19世紀末から20世紀半ばにおいては、この近代の難問をハイデッガーの存在論や J.Dewey らの道具主義として継承する。一方では、人は永遠について語り、行方知れずになった宇宙的生命の「イメージ」に酔い、存在の「暗号」を「呪文をもって呼び出す」。他方では、「自己」は、あらゆるものを自分より価値の低いものを見做して、これらを「道具」とみなすという思想の潮流が支配した。

しかし現代においては「自己」は自らの価値を道具（メディア、マルチメディア）に埋まった状況から紡ぎ出さなければならない。道具（メディア）の中に埋まって、我々ははじめて「自己」を意味づけ得る。かつての近代人は価値を自分の中から調達していると思い込んでいた。「自立性」や「主体性」という概念装置があった。しかし現代人は道具が我々に価値を授けてくれると思っている。近代人のように「自己」が夜郎自大になって膨張し続け、やがて破裂する風船のようなものになる必要はない。「自己」はメディア的環境の中から紡ぎ出されるものであり、そこで「情報」と戯れながら安住できるのである。

そして社会を Network システムとして捉える以上、個人人の管理と自立の問題が重要となり、その原理を立てるとき性善説と性悪説の塩梅というような中国古代の思想が蘇る。

例えばデータベースの改変が簡単に出来ないように有資格者を限定するような問題において。その際、我々は永遠の代償として当座しのぎの「基準」を設け、区別をしたり、差別をしたり、差別撤廃の動きに「参加」したりする。現代人はかつてのような当為と実行の乖離（汝なすべしに應えることの困難）を乗り越え得るような感覚を持つことができる。意欲と実行との乖離（私は欲する、しかし……）に苦しむことなく、メディアによって「イージーにアクセス」出来るようになることを当然と思っている。メディアの生産者に向かって、アクセス困難の苦情を言い続けることが美德となっている。近代以前は、天が当為を人に負わせ、近代では人間が意欲することを「自己」に負わした。現代では当為はメディアが負う。

近代では個人を統制することによって社会秩序を維持した。だからこそ、アナーキーな単独者の主張も意味を持ち得た。現代ではメディアによって社会秩序を維持する。なにしろ個人はメディア環境から刻々に紡ぎ出されては消え去り、更新されるものであるから、統制対象としての Identity を持つ個人など存在しないからだ。ニッチェと共に「何事ももはや真実ではなく」、「すべてが許されている」という「個人」がもはやどこにもいないのである。ニヒリズムの地平は消えた。つまり強いニヒリズムと弱いニヒリズムとを。新たな生への欲求か、生への嫌悪かのいずれかを選び生き抜く苦勞もなくなったのだ。

かつては新たな生を目指して我々は過去の重みから解放されることを欲した。しかし、我々は過去に対しては、あまりにも無力であり、かつ意欲することは「罪」になり「罰」になることに苦しまねばならなかった。さらに、この欲する意志そのものが過去の枠組みの鎖に縛られているために、自己言及のジレンマに落ち込まざるを得なかった。だが現代では「記憶」そのものが定着するほど「出来事」や「体験」そのものが力をもたないのだ。すべての出来事は刻々に変化する「情報」の文脈によって定義され、陳腐化され続けるものになったからだ。記憶はもはや「レトロ趣味」の対象として消費されるか、日々更新される「自己」になるものを少しばかり力づけたり、少々束縛したりするものとなった。

「教材」化されている「情報」も刻々に更新、陳腐化される。価値という言葉は各専門領域でなされる「情報」の更新に従属し、効果や強調点や優先順位という意味にまで切り縮められている。物事の推移は「進歩」であり、「発展」であることをもはや求められず、ただ「更新」のみが価値となる。宇宙のヒエラルキーを問う者はいなくなった。だから「地球にやさしい」などという滑稽きわまりない言葉が「学問」の世界にまで浸透しているのである。

「個人」は、ここで奇妙な立場に立たされる。「情報」環境によって意味づけられる「自己」が、情報の効果や強調点や優先順位を決めなければならないからだ。情報を定義する者が情報によって定義される。一貫性を確保するための文脈を提供する「基準」である「自己」は、情報環境から立ち現れてくる。この負荷に「自己」は耐えねばならない。

《結語》

我々の「体験」が「情報」に翻訳される前に、それを抹殺するものに対して、根元的な怒りの明確な刃を感じる。断念と忘却の頃合いを上手に測定すること。これは欲望更新のための余地をつくる特別な知恵である。なぜなら腹立たしいほど、この世は秩序に満ちているのだから。